
Tears of cotton

瀬見尾津凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tears of cotton

【Nコード】

N4649T

【作者名】

瀬見尾津風

【あらすじ】

自分はどこから来て、どこへ行くのか。自分は一体、何者なのか
答えない問いに悩まされる少年アランは、魔法を信じる少女
ブランシュに振り回される日々を送っていた。繰り返される退屈な
日常。しかし、アランの兄オーレリアンは言う。「魔法はあるよ、
実際に」

思春期にはありがちなことだと兄貴は笑った。

「自分がどこから来て、どうしてここに存在しているかなんて、その内にどうでもよくなるものさ」

「じゃあ、自分は一体何者なのかって問いには？」

すかさず質問をぶつけた俺に、彼はまた笑う。

「アランはアランだ、そうだろう？」

俺が聞きたいのはそんな答えじゃなかった。

むすつと口を尖らせて、俺は夕食を口の中へかきこむ。

俺は人間だ。

兄貴であるオーレリアンも人間だ。ただ他と違うのは、俺たちには両親がいないということ。だから俺は、十二歳年上の兄貴に育てられていた。

二人暮らしは楽しかったし、別に不満なんて無かった。

でも俺は、俺について知りたかった。

「サリュ、アラン」

と、スクールバスを待つ間に声をかけられ、振り返る。

「ああ、サリュ」

俺がそう返すと、ブランシュはにつこりと満足げに笑う。

「相変わらず元気ないのね。昨日、先生に怒られたから？」

「ちげえよ」

「じゃあ、何？ お兄さんと喧嘩でもした？」

と、ブランシュが首を傾げる。

俺はようやくやってきたスクールバスに目を向けて返した。

「お前には関係ないことだよ」

そしてバスへ乗り込む。

ブランシュは不満そうにしていたが、すぐに別の友人を見つけて

声をかけた。

「サリュ、クロエ！ この前話してた魔法、試してみたけど効かなかったわ」

彼女は俺のクラスメイトだ。綺麗なブルネットに白い肌の彼女は、魔法や幽霊と言った、目に見えないものを信じたがる傾向にあった。俺はむしろ、それらを否定するタイプなのだが、彼女曰く『俺と彼女は似たもの同士』らしい。思い当たることと言えば、彼女は両親を亡くし、里親に引き取られているということだ。俺も似た境遇なわけだから、確かに似ている部分はあるかもしれない。けれども、それだけだとは思えない。

バスが走り出し、俺は窓外の景色をぼーっと眺めた。

学校は退屈だ。勉強はもちろんだが、俺に突っかかってくるいじめっ子たちが一番うざい。

「おい、アラン！」

呼ばれたので振り返ると、俺の顔面めがけてくしゃくしゃに丸められた紙くずが飛んできた。ギリギリのところでは避け、床へ落ちたそれを何事もなかったかのようにゴミ箱へしまう。

「良い子ぶりやがって、うっぜえ」

振り返らなかつたらもつとひどいことになると分かっていたから、俺はいつの間にか冷静に対処する術を覚えていた。しかし、時々暴走して殴り合いの喧嘩になる。

昨日がまさに、そうだった。そして殴り合いの喧嘩のあとは、決まって哲学的な気分になるのだ。俺は一体、何者なのか？ どこから来て、どこへ行くのか……。

かたんと自分の席へ着いて鞆を降ろす。

先に着いていたブランシュが俺に向かって手を振ったが、何となく無視した。

結局、俺はこの退屈な日常を繰り返すしかなかった。

「おかえり、アラン」

「ただいま」

兄貴が居間でテレビを見ていた。

「仕事は？」

「今は休憩中」

と、手にしたドリンクを飲む兄貴。

ちよつと呆れながらも、俺は自分の部屋へ行つて荷物を置き、居間へ戻つた。

それから台所へ行き、何かないかと冷蔵庫を漁る。

「アランは、喧嘩になつても泣かないよね」

と、ふいに兄貴が言つて、俺は冷蔵庫の扉を閉めた。

「うん」

「強い子だね。いつからそうなつたんだろう？」

俺の兄貴は家に工房を構える人形作家だ。そのせいか、時々おかしなことを言い出す。

「知らねえよ」

言いながら、もう一度冷蔵庫を開けてジュースのペットボトルを手にとつた。

片方の手で冷蔵庫を閉め、兄貴に背を向けるように棚へ向かう。

「アランはあまり怪我もしないよね。喧嘩が強いのは良いことだ」

棚から取り出したグラスにジュースを注ぎ、一気飲みする。そして空になつたグラスへもう一度ジュースを注ぎ入れ、ペットボトルを冷蔵庫へしまった。

居間へ戻り、いつも自分が腰かけているソファへ座る。

「で、仕事は？」

「だから、今はまだ休憩中だよ」

相変わらずマイペースな兄だった。でも俺は、そんな彼が嫌いではない。

「ねえ、アラン。たまに、家族が自分に隠しごとをしているんじゃないかって思うことはない？」

その夜だった。

ブランシュは時々、何故だか決まった時間帯に俺へ電話をかけてくることがあった。

「隠しごと？ 別に……ないけど」

と、趣味で集めているフィギュアを見つめながら返した。

「あたしはね、あるのよ。ママはきつと、あたしに大事なことを隠してるって、疑っちゃうの」

「ふうん」

「パパだって、あたしに何か隠してる。それはたぶん、きつと、あたしの出生に関わる大事な秘密ってことね」

妙に自信ありげに言うから、俺は呆れてしまった。

「悲劇のヒロイン気取りか？ お願いだから、そんなくだらないことに俺を付き合わせるなよ」

すると、機械の向こうでブランシュは言った。

「本当のことよ、真面目な話なの。ってゆーか、こんな話……アランにしか出来ないから、してるんじゃない」

俺たちは恋人同士ではない。なのに、時々俺は、彼女が俺に好意を抱いているんじゃないかと勘違いしそうになる。

「分かってくれないならそれでも良いわ。でもね、アラン」

「何だよ？」

「あたしたち……やっぱり似たもの同士だと思うの」

しかし彼女もきつと思春期で、俺と同じように何か答えの見えない問いにぶつかっているのだろう。

ただそれだけのことで、俺たちの日常が急に変わるなんてありえない。

「そつだと良いけどな」

ブランシュが満足そうに頷くのが分かった。

翌日、彼女はまた俺へ言った。

「アラン、あたし、昨日徹夜で調べてきたの」
昨夜の続きだった。

「調べたって……で？」

少し困惑しながら、話だけでも聞いてやろうと促す。

「アランは魔法を信じないって知ってる。でもね、それは実在するのよ」

「はあ？」

悲劇のヒロイン話かと思ったのに、彼女お得意の魔法が出てきてうんざりした。

「もちろん、今の世界に魔法使いは多くない。だけど、中にはすごい能力を持った魔法使いがいるの」

彼女はやっぱりおかしい。

俺があからさまに興味を無くしても、彼女は口を閉じなかった。

「そしてその魔法使いは、人々にそれを与えるの」

「どうせ、ただの噂だろ？」

と、俺が口を挟むと、彼女は悲しそうな目をした。

「噂じゃないわ、本当のことよ」

「あ、そう。でも俺、マジで魔法とか興味ねえから」

ぶっきらぼうにそう言っで、俺はさっさとその場を立ち去った。
彼女の話なんて、ちっとも頭に入っていなかった。

しかし、放課後になって彼女は行動を起こした。

「来て、アラン」

と、ぐいっと腕を引っ張られどこかへ連れて行かれる。

「何すんだよ、ブランシュ！」

「いいから来るの！」

何故か怒鳴られてしまい、俺は抵抗する気が失せた。もっとも、抵抗と言っても口で文句を言うだけだが。

そして彼女は、人気のなくなった空き教室に俺を連れ込んだ。

「あたしね、やっぱり普通の子じゃないかもしれない」

そんなこと、俺にとっては魔法と同じくらいどうでも良かった。すると彼女は、俺の顔をじっと見つめてから、服を脱ぎ始めた。なんて大胆な……と驚くのも束の間、俺はすぐに彼女の言いたいことに気がついた。

「……その傷」

「ええ、これが何よりの証拠。あたしは、魔法使いに作られたの」意味が分からなかった。しかし、彼女の腹には大きな縫い跡のような傷があった。まるで、人形を糸と針で縫ったような痕だ。

「作られたって……でもお前、人間だろ？」

作り物だと思い込みたくて、俺は無意識にそう尋ねていた。ブランシユは首を横に振った。

「だから、あたしは魔法使いに作られたのよ。人間じゃない」

ありえない。

ありえない、ありえない。

「そんな手の込んだことして、俺に魔法を信じさせようとしてるんだろ？ 無駄だ、俺は絶対に信じないぞ！」

胸がドキドキと高鳴っていた。何だか恐くて、目の前の日常が非日常へと変わってしまったのを認められなかった。

下着姿のブランシユが悲しそうにして、俺は構わずに背を向けた。「勝手にしろ、俺はもう帰る」

と、扉の方へ歩いて行く。

お願いだから呼び止めてくれるなと願っても、遅かった。

「じゃあ、アランは？」

思わず立ち止まってしまふ。

「アランは、お兄さんのこと、全部知ってるの？」

「……っ」

何も言葉を返せなかった。全部知ってるはずなのに、何故だか不安になってくる。

俺は、兄貴のことが好きだ。兄貴だって俺のことを愛してくれているはずで、隠しごとなんか一つもあるはずない。あってほしくない。

それ以上考えられなくて、気づくと俺は駆け出していた。

魔法使いが現実にしたとして、どうして人間でないものを作り出す？ その方法は？

「今日もまた、何か考え込んでるみたいだね」と、夕食の席で兄貴が言った。

「うん……」

俺は彼の目を見られなかった。ブランシュの言葉が忘れられず、すっかり悩まされていたからだ。

しかし、兄貴は特に尋ねるようなこともせず、いつもどおりに食事を持っていた。

きつと、ブランシュがおかしいだけだ。

あいつはどうしても非日常に自分を繋げたがる。悲劇のヒロインを演じて、俺の気を引こうとしているんだ。

だから俺には関係ない。

俺は俺で、兄貴は兄貴で、いつもどおり、これまでと何一つ変わらないように過ごせばいい。

「ブランシュって子、アランに気があるらしいね」

と、唐突に兄貴が言った。休日だった。

「別に、そんなんじゃないよ」

「そうかい？ よく電話で話してるじゃないか」

兄貴はきつと俺をからかいたいのだろう。

「彼女の方からかけてくるんだ。仕方なく付き合っただけだよ」

素っ気なくそう返し、俺は読んでいた本に視線を戻した。

弟をからかうのに失敗して、兄貴がちょっとだけしよげるのが分

かった。普段なら、そのまま仕事へ戻るか別の何かを始める兄貴だが、今日は違った。

「いつか、僕はアランに言ったよね。魔法なんてこの世に存在しない」と

本から視線を上げて彼を見る。

「うん。だから俺も、魔法は信じてないよ」

ブランシュとの会話が聞かれていたのかと思って言い返すが、俺の向かいへ腰かけた兄貴は笑った。

「本当は嘘なんだ。魔法はあるよ、実際に」

「……え？」

意味が分からなくて、俺は思わず姿勢を正すと本をその辺に置いた。

「何が嘘なんだよ、兄貴」

どこか遠い目をして、彼が俺をじつと見つめる。それはまるで俺の存在を教えるようだったが、決して好意的ではなかった。

それを証明するように、兄貴の右手がポケットからナイフを取り出す。それは彼の仕事道具でもある愛用の刀だった。

「アラン、君はまさにそうなんだ」

ナイフの切っ先が俺の身体に向けられ、思わず腕をあげて防御した。その直後に切り裂かれる俺の右腕。

兄貴がにこつと笑う。

「ほら、君の中にあるのは綿だけだ」

赤い液体は垂れていなかった。代わりに落ちる白い綿。

「……」

俺の右腕は、綿で溢れていた。今まで人間だと思っていたはずの俺が消えていく。

兄貴はナイフを下ろすと、俺の右腕を取って言う。

「アランは僕が作り出した人形なんだよ」

「にん、ぎょう……？」

「そう。三年前に両親を事故で亡くした僕が、寂しさを紛らわせる

ために生み出した」

頭がぼーっとする。俺は人形、兄貴だと信じていた人は生みの親、ブランシュの言う魔法はここにあり、彼女の言う魔法使いは俺の……ああ、気がおかしくなりそうだ。

オーレリアンは笑って、俺の頭を優しく撫でた。

「僕の魔法が君の命。魔法が解けたら君は死ぬ」

まるで命が途切れるように、俺は動けなくなっていた。

「人形は飽くまでも人形だ。僕たち人間に従い、楽しませるための玩具にすぎない」

心が痛んだ。そんな風に思われていたなんて、ひどい。俺は兄貴のことが好きだったのに、どうしてそんなことを言うの？

「だから、人形が人形だと自覚してしまったら、それはもう、人形じゃない」

「……どうして」

悲しいのに、涙は出なかった。俺は泣かないんじゃないって泣けないんだと気づかされる。

「人間でもない人形には、居場所がなくなってしまふんだよ」

オーレリアンはすべて知っていた。

そつと腕を伸ばし、抱き寄せる。その温もりすら、俺にはないように思えてならなかった。

「でもアラン、僕なら君をこのまま生かすことも出来る。何度だつて、君を作り出してあげられるよ」

「……うん」

彼は人形作家。俺を生み出した魔法使い。傷ついても、上手く直してくれる。

「どうする？ アラン」

ぼこぼこになった右腕が痛い。でも俺は人形だ、痛みなんて感じないはずなのに……痛くて仕方ない。

ブランシュもきつと、こんな感じだったんだろうな。自分が人間ではないと知って、同じ仲間である俺にそれを知らせて、きつと助

けを求めた。なのに俺は、裏切った。

「……ここにいたい」

謝ろう、彼女に謝ろう。

オーレリアンが俺を離し、にこっと笑った。

「分かったよ、アラン。道具を持ってくるから、待っていて」

ぱたぱたと工房へ向かっていく。

俺はその間に電話を探した。いつもそこにあるはずの電話機を探し、左手で取る。

ブランシュの家の番号を押し、耳に当てた。

「アランです、ブランシュは――」

俺の言葉を遮るように、彼女のママが叫んだ。

「昨日から家に帰ってないの、どこに行ったか分かる!？」

* * *

オーレリアンは俺の右腕を器用に直してくれた。綿はもう見えな
いし、縫った痕も彼女と違ってあまり目立たない。

「行かなきゃ」

彼が顔を上げて問う。

「どこへ？」

「ブランシュのところ」

居場所を無くした彼女を、助けなきゃ。

オーレリアンは少し寂しそうな目をして、道具を箱へしまった。

「きっと、もう手遅れだよ」

そう言われても、俺の心は揺れなかった。手遅れでも構わないか
ら見つけ出したかった。

腰を上げて普段から愛用しているパーカーを羽織る。

「行ってくる」

背を向けた俺に、オーレリアンは何も声をかけなかった。
少し寂しかったけど、今は構ってられない。

ブランシュの行きそうな場所なんて知らない。心当たりなんて一切無く、彼女についても実はよく知らない。

ただひとつ思っているのは、学校にはいないということだけ。

人間がうようよしている場所に、人形は入っていけない。そこにあったはずの居場所は、もう幻だから。

なるべく人気のない場所を中心に当たった。しかし、ブランシュの姿はない。

数時間が経ち幾分か冷静になる。俺だったらどこへ行くかと考えて、小さな公園や路地裏を走ることにした。

それでもやはり、彼女は見つからなかった。もしかすると、すでにどこかで消えているのかも分からない。そう考えると寂しくて、急に胸がもやもやしてきた。もっと、もっと彼女に優しくしておけば良かった。

「そんなに息を切らせて、どうしたの？」

聞き慣れた声にはっとする。

「アランらしくないわ」

黒い髪をぼさぼさにして、ところどころ汚れた服を着たブランシュがそこにいた。

どんな言葉を返そうか迷って、感情のままに俺は彼女を抱きしめた。

「……アラン？」

「ごめん、ブランシュ。俺……俺も、お前と同じだった」

そつと離れて、治療してもらったばかりの右腕を彼女へ見せる。

「俺も、人形だった」

すると、彼女は笑った。

「何を言ってるの、アラン。あんなの、嘘に決まってるじゃない」

「え？」

理解を失う俺にブランシュはからかう様子もなく口を動かす。

「あたしは人間よ、ただの人間。アランが勝手に動き始めるから、

あたし、とっても苦労したのよ」

彼女は人間？

「そうね、やっぱりオーレリアンの魔法は本物だね。だけど、あなたはあまりにも人形らしくなかった。まさか、主人の命令も聞かず暴走するなんて」

彼女は一体、何を言っているのだろう？ 分からない、分かりたくない。俺は人形、人形は……人間に従うだけ。

「でも、ようやく理解したようね。あたしは、彼にあなたを作るよと言ったのよ。三年前、両親を事故で亡くし、あたしは兄に頼んだの。離ればなれになるのは辛いから、お人形を作ってって」

「……どういう、ことだ？」

ブランシュは俺をぎゅっと抱きしめると、耳元に囁いた。

「だから、アランはあたしのお人形なの。あたしを主人と認識しなかったせいで、取り戻すのに苦労したってこと」

嫌な考えが頭を巡る。

オーレリアンが俺を作ったのは本当だけど、俺が従うべき人間はブランシュ？ でも、彼女は俺のクラスメイトで……。

「思い出したかい？ アラン」

はっと振り返ると、そこには兄貴だった人が立っていた。

ブランシュのように微笑んで、彼女の言葉を全肯定する。

「すべてブランシュの言ったとおりだ。君は元々、彼女の……いや、僕が妹のために作り出したんだよ」

さっきまでそこにあっただけの居場所は、ついに居場所じゃなくなった。それはただの、在るべき場所。

「俺が、ブランシュの……？」

「そうよ、アラン。だからあたしは、あなたにすべて思い出させようとしてたの。オーレリアンではなく、あたしのところへ戻ってくるようにって」

太陽が沈み始め、俺は呆然としていた。

頭を整理するので精一杯なのに、俺はどうしてか、ブランシュの

腕の中を心地良いと感じてしまう。

どうして、どうしてこんなことに？ 違う、俺は元々人間ではなくて、俺は二人に騙されていた？ じゃあ、何で？ 何で俺は、ここにいる？

ついに知らされた答えに納得がいなくて、混乱していた。すべて分かりきった問いなのに、俺は別の答えが欲しくてたまらない。おかしい、何かがおかしい。でも何故だか、動けない。

「さあ、帰ろう」

と、オーレリアン。

「そうね、ママには心配かけちゃったみたいだし……やっぱり、怒られちゃうかしら？」

初めて見るブランシュの姿。今までの彼女とは違う、俺の知らない彼女。

手を引かれて歩き出す。

オーレリアンが笑う。ブランシュも笑う。だから俺も、笑った。

俺は人形。オーレリアンに作られ、ブランシュに捧げられた人形。中身は綿だけ。喧嘩は強いけれど、俺には流すべき涙がない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4649t/>

Tears of cotton

2011年5月22日12時10分発行